

主な評価項目	今年度の取組と成果	今年度の課題と今後の改善策
<p>地域連携 保護者連携</p>	<p>・今年度はコロナの影響で諸活動(年間6回のフレンドリークラブ、運動会、川崎ふれあいフェスタ、熟年の集いでのかんこ踊り披露、Nコンや全日本合唱コンクール PTA総会や授業参観、教育懇談会等)が中止となった。そんな中でも、3日に分けての運動を楽しむ会とDVD配付、映像・写真のHPアップ、学校での野外研修(デイキャンプ)、高齢者へのハンカチ染めプレゼントなど、制限の中で工夫を凝らしながら取り組めたことが多かった。</p> <p>・ふれあい活動室等の共有ゾーン活用においては、会議使用やくろぼくふれあい活動2団体による使用、GTの控室、PTA会長によるお試しカフェの取組、PTAによる活用アイデア募集、ふれあい活動室試験開放宣伝と管理人募集、旧フレンドリー農園でのヒマワリづくりやヒノナ収穫体験と川崎ふれあい収穫祭への参加等、活用推進に向けた動きができた。</p> <p>・地域や保護者の力を借り、交通安全教室や交通安全啓発活動、毎日の交通安全見守り活動、地域の方との危険箇所や獣害等の情報共有などができた。また、コロナの影響下においてPTAとの連携も継続できた。家庭との連携による新型コロナ対策の徹底やPTA広報誌の充実と発行増、PTA本部主催の「児童が楽しむ会」の新企画、ふれあい活動室活用に関するアイデア募集、家庭学習(自学自習)の習慣化やネットモラル学習(啓発)などである。</p>	<p>・地域とともにある学校づくりの地域肯定的回答は94.7%(R1 100%)で、新型コロナによる行事中止等の影響もあり、地域と学校が疎遠になっている感じがある。引き続き、対子ども保護者はもちろんのこと、対地域住民に対する丁寧な対応と信頼される関係づくりにさらに一層努めるとともに、職員間で共通理解の下、組織的に地域と関われるよう、地域連携部会の創設等も検討すべきである。</p> <p>・ふれあい活動室等が日常的に地域や保護者に活用されるにはまだ至っていない。今後、共有ゾーン活用推進委員会を継続する中で、試験開放実現も含め、コロナ収束後にすぐに動けるようアイデアの議論と具体的準備を進めておく。また、PTAの活用アイデアを具現化していく必要がある。(まずは、学校の用具や服等の「もらってください市」の開催)</p> <p>・共有ゾーンの活用においては、地域や保護者のニーズの中での活用と、学校の教育活動におけるGTやボランティア要請の中での活用の2面がある。学校としては、後者において、教育活動の見直し(教材発掘や指導におけるGT活用)、学校として必要なボランティアの選定等を行う中で、付随的に共有ゾーンの活用につなげていくという共通理解が必要である。</p> <p>・学校からの主な情報発信は、学校だよりを17号まで発行、学年通信は各学年、各月1回程度、メール配信(計137回)、TV取材等10回であった。多くの行事が中止、あるいは公開できなかったことを踏まえ、今後、新型コロナの収束状況を見ながら、改めて開かれた学校づくりに向けて再起動、尽力する必要がある。</p> <p>「開かれた学校づくり」肯定的回答 保護者 97.1%(R1 98.7%) 地域 94.7%(R1 100%)</p> <p>また、学校学年学級だより、HP更新による情報発信とその中身の充実がより一層求められている。</p>
<p>社会に開かれた教育課程</p>	<p>・地域関連学習は一部新型コロナの影響で取り組めなかったこともありながら継続を図った。とくに、新型コロナで臨時休業中からその後に至るまで、地域の方々に苗や学習園の準備作業、花壇や芝などの学校環境整備で大変お世話になった。地域の方から作物づくりや地域のことを学ぶことができた。その結果、調べ学習を通して、情報の収集と整理分</p>	<p>・地域関連学習において、地域の方との直接的な関わりや交流が少なかった。引き続き、川崎の「ひと・もの・こと」を最大限に活用し、川小ならではの学習を作り上げるべきである。学校が子どもたちに提供・実現したい学びについての議論を深め、身近な地域教材の見直しあるいは新たな教材化により、地域関連学習として、生活・総合のみならず、教科学習の場面でもさらに地域の特色や人材を活用した</p>

	<p>析する力、まとめる力、プレゼンによる表現する力がついた。地域への興味関心を高めることができた。</p>	<p>教材や指導を再構築または発掘していく必要がある。また、Zoom も含め地域の方とかかわる形も検討すべきとの声もある。</p> <p>・“深い学び”を実現するために、「総合的な学習」「体験活動を交えた教科学習」について指導過程の充実〔自己課題設定・探求（調査体験）・評価・まとめ発信・ふり返し活動〕が引き続き必要。</p> <p>・フレンドリークラブの再開と継続、さらに地域の名人の発掘に取り組みたい。</p> <p>・学習成果の発表の場として、また児童にとって活動や学びの大きな“ふり返し”と自己肯定感を高める場、地域参画地域貢献の場として大切な地域行事との連携が図れなかった。（「川崎ふれあいフェスタ」での販売体験、運動会や熟年の集いにおける「かんこ踊り披露」等）また、NHK音楽コンクールと全日本合唱コンクールへの参加もできなかった。来年度、再開に向けて積極的に取組を進める。</p> <p>・外部講師やボランティアなど地域のマンパワーの導入が新型コロナの影響で停滞している。まち協、自治会、PTA組織の協力を得て、仕切り直す。また、これにより共有ゾーンの活用につなげる。</p>
<p>危機管理 保健安全</p>	<p>・危機管理マニュアルの見直しや研修（8/21）、アレルギー対応研修会（4/10、8/6）、救急対応研修会（1/13）ハラスメント防止研修会（8/6、12/23）など、危機管理に向けて職員で共通理解を図った。今年度からアレルギー対応におけるミス防止カードの作成を行っている。また日頃から教職員の服務規律の徹底に向けて啓発できた。</p> <p>・「防災訓練」は校内の避難訓練（火災）のみ1回実施。5年生が野外研修の中で地震体験実施（10/30）</p> <p>・登校指導は計画通り10回実施。交通安全教室は川崎駐在さんやまち協の防犯部員さんの協力の下で、10月に各学年単位で実施。4月から自転車通学する6年生対象の交通安全教室も3月中に実施予定。児童の交通事故は1件のみ。</p> <p>・保健指導は通常の指導に加え、新型コロナ感染防止について継続的な指導・取組ができた。</p>	<p>・地震を想定した避難訓練、防犯訓練、引き渡し訓練はいずれも実施できていない。また、生活習慣改善啓発活動として「ザ・談会」「給食試食会」「学年PTA」「ふれあいフェスタ」などの場で、児童を取り巻く生活環境の向上を図る保健安全教育（食・性・睡眠に係る教育）を実施できなかった。</p> <p>地域や家庭との連携の下での実施を再開する必要がある。</p> <p>・「子どもの安全を守る連絡会」との情報交換を強化し、登校指導の場で、地域の見守り隊の方との定期的な顔合わせや感謝のお声がけが必要。</p> <p>・引き続き、様々な状況下で、子ども自らが危険を回避したり低減したりするための判断ができる交通安全・防犯・防災訓練を行っていく。</p>

<p>生徒指導 進路指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「子どもの理解を深める委員会」(月1回)やケース会議、教育相談、毎日の出欠状況に関する情報共有により、不登校児童や生徒指導事案、虐待事案や保護者相談、個別の支援を要する児童対応等を組織的に行き、必要に応じて外部機関(子ども支援Gや児童相談所等)との連携がとれた。(不登校児童3名。虐待事案3件)</li> <li>・いじめに関しては、アンケートや相談等で把握した児童間のトラブルを丁寧に把握し管理職も含め組織的に情報共有しながら対応できた。(いじめ1件)</li> <li>・Q-U調査を2回実施し、学級内での個々の子どもの思いを探るとともに、「QU調査をもとにした学級づくり」、「いじめを生まない学校づくり」についての研修会を3回実施した。(8/5、12/23、1/13)</li> <li>・学年に応じたSNSやネットモラル学習を実施。メール配信等で保護者へも啓発できた。</li> <li>・キャリア教育の一環として4年生でドリームマップ学習に取り組んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・虐待や不登校といった課題への対応のため、現在の取組を継続するとともに、SCや子ども支援Gおよび鈴鹿児相との連携を更に密にして臨む。</li> <li>・自分と仲間を大切に作る心と実践力の育成に向けて、魅力ある学校づくり、各種集会活動、学級自治活動、社会福祉体験、合唱コンクール(Nコン、全日本合唱コン)参加等、自己肯定感につながる活動や取組を推進していく。</li> <li>・家庭での生活習慣の向上と読書や家庭学習の推進について学校だより等での啓発を継続していく。</li> <li>・「川崎小学校十か条」を校舎内に掲示した。これを生活指導の基本に据えて活用方法を検討する。</li> <li>・きめ細やかな支援・いじめのない居心地の良い学校(学級)づくりを常に意識して日々の教育活動にあたる。 ※アンケートA評価が低い 保護者31.3%(R1 38.3%) 地域 42.1%(R1 45.0%) 教職員62.1%(R1 77.4%)</li> <li>・児童のSNSトラブル防止やタブレット使用における情報管理の強化が必要である。</li> </ul>
<p>学習指導 外国語教育 学力向上 少人数指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員1人年1回以上の授業公開を実施し、「川小版 学習規律」と「川小版 学びのスタイル」に基づき、確かな「ふり返り」と「深い学び」を実現する授業改善への教職員の意識が高まっている。 「学校の授業が分かる」 児童肯定的回答92.2%(R1 92.6%) 「自分の考えをしっかりと伝えることができる」 児童肯定的回答80.4%(R1 76.0%) 「ふり返りの充実」教職員肯定的回答91.3%</li> <li>・市教委作成国語確認テストを活用し、「書く力」の育成に注力した結果、子どもたちを書くことに対する苦手意識が少なくなってきた手ごたえがある。 「書くこと」児童肯定的回答91.6%(R1 88.8%) 「書く活動の実施」教職員肯定的回答87%</li> <li>・「家庭学習の手引き」「自主学習の手引き」の配布、自主学習プロジェクト(自主学習ノートの掲示)等により家庭での学習時間に一定の改善がみられる。</li> <li>・朝の読書の実施、「かめやま読書チャレン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き、「読む力」「書く力」「活用する力」を育てるために、各教科で横断的に意識して取り組む必要がある。</li> <li>・話し合いなど、友達と対話しながら考えを深める学習の充実をさらに図る必要がある。</li> <li>・「確かなふり返り」や「深い学び」に向かう授業改善の継続に向け、指導案の書き方や授業公開の持ち方について検討していく。</li> <li>・総合的な学習の時間や体験活動を交えた教科学習における指導過程の充実を図っていく。</li> <li>・家庭と連携した家庭学習と読書習慣の定着を進める。</li> </ul>

	<p>ジ」等により、図書貸出冊数が増加した。  ※R2年4月～R3年1月 87冊  (R1年度4～1月70冊)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国語・外国語活動は、ベテラン英語非常勤講師からの指導援助を受け授業実践力が向上した。(スモールトーク、授業の流れ、成果検証など)</li> <li>・R2みえスタディチェック1回目(9月実施)正答率は、5年生の理科を除いて、県平均正答率を5.9～11.4ポイント上回る。(5年理科は2.2ポイント下回る。)また、5年生は、4年生時に算数、国語ともに県の正答率を下回っていたが、R2年度はともに上回った。少しずつ、学力向上の結果が出てきているものと考えられる。みえスタディチェックの結果と考察の発信で地域保護者と課題の共有ができた。</li> <li>・朝の学習や毎月1回の補充学習(ぐんぐんタイム)、サマースクール(5日間開催)、「わかるできる育成カリキュラム」「学 Viva(ワークト)」等の繰り返し練習により基礎学力の定着につなげた。</li> <li>・4、5年生算数習熟度別学習の効果的な実践の積み重ねができた。</li> </ul>	<p>※みえスタディチェックから考えられる課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初めて見る長文の読み取り</li> <li>・身近な事柄を数学的な見方・考え方で捉えること</li> <li>・グラフの読み取り</li> <li>・データを見比べて読み取る。</li> <li>・キーワードや字数制限などの条件に沿って説明したり記述する。</li> <li>・5年生対象の第2回みえスタディチェックは結果を入力中。今後、最新の学力定着状況を分析のうえ、成果や課題を洗い出す。</li> <li>・学習内容の定着に2極化がみられるため、きめ細やかな個別指導が一層必要である。</li> <li>・4、5年習熟度別算数の継続とともに、コースごとの児童の学習意欲を高める工夫が必要。</li> </ul>
<p>人権教育  道徳教育  特別支援教育  情報教育  食育等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人権カリキュラムの見直しや新型コロナウイルス感染における差別中傷等防止に向けて「優しさいっぱい大作戦」を行った。</li> <li>・子ども支援ネットワーク・アクション事業(中部中学校区)では、初めて地域の方の参加も得た人権フォーラムが開催できた。</li> <li>・児童会による全校SSTの取組や人権標語づくりなど、暖かいメッセージにあふれた学級づくりに取り組めた。児童の自己肯定感は少しずつ上がっている。  「自分にはよいところがある」  児童肯定的回答80.4%(R1 77.1%)  ※6年生 7月実施70% → 12月実施80%</li> <li>・特別支援学級、通級児童、外国人児童に関する「個別の指導・支援計画」の作成は完了している。(100%)個別の指導計画および</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人権教育の内容で漏れがないように、カリキュラムの実践や見直しを適宜行っていく。</li> <li>・引き続き自己肯定感を高めるための取組や認め合いの場、児童の自治的諸活動の場を日々の学習・生活の場に意図的に設定していく。</li> <li>・関係機関や保護者との連携のもとで個々のニーズに合った支援を推進する。</li> <li>・1人1台端末導入にあたり、ロイノート等、タブレットを日常的に活用した授業実践を行う。</li> <li>・引き続き、考える道徳の実践を進める。</li> </ul>

	<p>支援計画の作成と手立ての見直し、成果の共有が図れた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報教育については、ロイロノート研修会(8/6)やロイロノートを使った授業研究(5年1/26)など一台端末に向けたタブレットの活用が進みつつある。SNSの危険性に関して資料を作成し学年に応じて指導した。</li> <li>・道徳は年間計画に沿って実施。道徳に関する研修会は2回実施(5/28、1/13)</li> <li>・食育に関しては、たよりや掲示物の作成による啓発、授業実践を進めることができた。</li> </ul>	
<p>総勤務時間の縮減</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パソコンログによるより正確な時間外労働の把握が進み、働き方改革への意識が醸成されつつある。</li> <li>・会議時間の短縮、ペーパーレス会議の開催、SSSや学習指導員の活用、教材データ等の整理と保管の見直し、回覧の工夫やホワイトボードの活用、意識向上等、衛生推進委員会を中心に取り組んだ。</li> <li>・昨年度より早く退校できているという実感を持っている教職員もいる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>※R2度時間外労働23.7h(12月末まで) H28:30.6h H29:25.2h H30:24.2h R1:18.6h</li> <li>※R2年度月45h超え累積のべ10人(12月末)</li> <li>※R1年度月45h超え累積のべ13人</li> <li>※月80h超えは0人</li> </ul> </li> <li>・年休取得はR1年度に比べて、概ね2.7日の増となった。(4~1月平均合計)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標時間(25h)は年間平均を見ると達成の見込みだが、月によって、また個人によっては25hを超える場面がみられる。</li> <li>・勤務時間縮減に向けて、衛生委員会による時間外労働状況の確認と、さらに時間外労働を減らすための具体的方策を考える。</li> <li>・学校ボランティアは、新規で図書1名、剪定1名という状況である。学校ボランティアが業務の一部を担う取組を早期に導入することができるように、対象業務の選別から始め、ボランティアの確保、保護者への周知と理解、教職員との分担連携協働を目指したい。</li> <li>・CS会議等で保護者や地域の方々に学校の課題として伝える。</li> </ul>